甲斐、谷口さんの職場復帰

法廷で証明された会社の横暴

四名の無実は氷山の一角

三池闘争で、警官は激しく労働者に襲いかかつた

すでに三池労組発のビラでも明らかにしたように三池闘争当時の「暴力事件」を会社側からデチッ上げられ解雇になった人のうち法廷闘争中の甲斐弘さん、船盛順二さん、浜田義春さんの三名が解雇無効となり、また昭和三十七年、「転制指示違反」という名目で一方的に解雇された谷口岩夫さんも、「地位保全の仮処分」がみとめられ三井鉱山の横暴が法廷で明るみにだされた。四名の無実が証明されたことは氷山の一角に過ぎまいが、それにもせよ、今後の同様の闘いに大きな勇気を与えるものである。

会社の行きすぎ認める

甲斐さんら三名は他の二十七名とともに「仮処分」申請の申し立を行なっていたが、これは昭和三十五年三月二十七日、会社側がストライキ中の三池労組を崩し、第二組合を結成し、その第二組合員（約四千名）に就労命令（スト破り）を発したことから生じた混乱の中で発生した、新労組員への説得活動などを、一方的に「暴力行為」と断定され、解雇されたものだった。

甲斐さんら三名は昭和三十五年六月三日、山吹地域分会で第二組合に脱落したNさん、Yさんを闘争本部につれていき、五時間近く脅迫したとデッチ上げられたものだったが、甲斐さんら三名が直接二名の新労組員と話したり、とくべつ脅迫行為はしていないという主張が認められたものである。

三十名の裁判では、三池闘争中の混乱をひきおこした原因が会社側の組織介入と、当然混乱が予想されるにもかかわらず行なわれた就労命令、あるいは暴力団や警官隊の導入、ひいては三池闘争自体がおこらざるをえなかった合理化計画自体には何らふれられず、単なる事実の成否のみが判断の基準にされていることが、なお多くの人びとを無実と判定できないものとなっている。

保安闘争がクビに

谷口岩夫さん（四山支部転場分会長）は、昭和三十六年九月十二日の一番方で四山鉱五百六十メートル部内西五昇ホーベル払に繰り込まれ、二人の同僚と炭壁に孔をくり二十本のマイトを装填、結線し、撃ち上げ穿孔十本にマイトを装填していたとき堀内係員（保安係）が、マイト装填をしたすぐ近くにもう一本孔をくれといった。

谷口さんはその個所がマイト装填を終った孔にあまりにも近すぎ穿孔の振動でマイトが暴発する危険があったので「危険だから一回発破して二回目に穿孔発破した方がいいのではないか」といったら堀内係員は「作業指示を拒否するのか」とつめ寄り、口論となった。

ところが九月十四日から会社は谷口さんに「作業指示拒否、暴力行為、生産阻害、反省の色がない」といいたて出勤を禁止し、昭和三十七年一月十八日にはついに懲戒解雇にしたのであった。マイト暴発の危険が十分にある個所に孔をくれという係員の指示を「生命に危険があるから二回目の発破のときに孔をくる」という谷口さんの主張にまるで難クセをつけ、不法、不当な処分をしながら会社は、「九月十九日までに会社に謝罪せよ。謝罪したら退転金百三十万円ぐらいあるから、これを見舞金としてくれてやる。そのかわり頭を下げてこい」などといってきたりした。

谷口さんは仲間の激励をうけながらあくまで闘う決意を固め、六年間の裁判闘争を闘い抜いてきた。当時の会社のこのような残忍なやり方のウラには、「一万五千トン出炭」のために労働者の生命にはふりむきもしないという態度の震骨なあらわれであった。

豆ニュース【KNA】

4・28海上大会。感激のあまり海に落ちた人も四人。なんの冷いものか、血は海水よりも濃い。

×　×

九年ぶり（岸政権以来）の倒閣メーデー。さあ、春闘勝利を足場に参議院選挙でがんばろう。

×　×

ベトナム民主平和勢力連合、救国宣言を発表。広がる人民の鉄の輪、米帝かいらいをしめあげる。

職場の人の苦しみ思い作ら

甲斐　弘さんの話

素直にいって七年間の裁判はつらかった。子供五人の七人家族で、生活は苦しかった。解雇されたとき、ニワトリを四百羽ほど飼っていたので、養鶏をして食っていこうと思い数をふやしたが、なにしろ素人なので失敗だらけだった。エサのニセモノをつかまされたり、病気でニワトリが死んだりして、一時は八十万円もの借金を背負ってしまったこともあった。

そんなときは、途中でなげ出して、家を売って関西方面に出稼ぎに行こうかとも思ったこともあった。こんなときに支え、はげましてくれたのは家内だった。

養鶏の方も昨年くらいからなんとか安定し、生活だけはできるようになったが、まだ将来の見通しなど全然立たない。だから、今後養鶏は家内にまかせて出勤するつもりだ。

病気もしなかったので、身体には自信がある。卵を買いにくる人には第二組合員が多いので、いろいろな情報は聞いていた。職場に残っている人は、私以上に苦しんでいると思っていた。

判決の日は裁判には出席しなかったが、夜のニュースで聞いた。私も家内もとても信じられず、一晩中ねむられずに話し合った。二、三日の間はとても実感がわかなかった。

三井鉱山は私たちにも、職場にいる人にも人間らしい扱いをしていない。労働者の憎しみを背負って事業をやっても、決してよくはならないはずだ。必ず会社は反省しなければならないときがくると思う。

あと十年を仲間と共に闘う

谷口　岩夫さんの話

クビを切られたときは四人の子どもが小学校二人、中学校二人で生活的にも一番苦しいときだった。

単なる口論で解雇されたのには怒りの前におどろいたが、クビを切られてしまうと炭鉱しか知らない自分なのでどうやって食っていこうかと迷ってしまった。

「退転金が百三十万円くらいあるのでとりに来い。会社にあやまれば見舞金としてくれてやる」といわれたが、悪いことをしてないのに一方的にデッチ上げられたことを自分では絶対認めたくはなかったので裁判をやろうと決意した。

しかし失業保険は九ケ月しかないし、それが切れたらいよいよ食えないので一般失対に入った。日給は四百五十円の日払いだから金は足らん。いよいよ金がないと「裁判など無理なこつばしたはい」と思うときもあった。

家内も気が強いので「どうせやるなら、トコトンまでやらんネ」といってくれた。家内も土方にでたり子守りの手伝いをしたりしてがんばった。クビ切られて裁判を行なっていると、だれでも三年間がきつい。三年がすぎると「危険でないだけがもうけたい」と思うようになった。

判決の日は家内と二人で法廷に行った。勝ったという判決がでたときは信じられないくらいだった。「現実になるとは……」と思った。一週間くらいして勝ったのだという実感がしてきた。勝った翌日は一人で四山鉱の正門に立って出入りする人にお礼をいった。第二組合員までが「良かったのう」といってよろこんでくれた。

この勝利は私だけでなく新労組員にも大きな影響があると思う。

六年間は苦しかったが、やっぱり三池労組の人たちががんばっているということが支えだった。勝つためにはどんな苦しいこともやり抜かねばならないと思った。仲間との連帯であと十年間を闘い抜きたい。

写真上は甲斐さん下が谷口さんご夫婦

〝人間は金より強いんだ〟

映画「若者たち」

現実に闘いを挑む若者を描く

「若者たち」という題の映画が六月二日から大牟田中央松竹で上映される。

この作品は昭和四十一年二月から九月までフジテレビで放映されたテレビドラマの映画化である。放映中から若い人たちの圧倒的な支持をうけ二十万通におよぶ激励文がフジテレビにとどき、その反響につき動かされたスタッフが同じキャストにより製作した独立プロ作品である。

昭和四十二年三月にできあがり現代青年のすべてを描ききったマジメ映画として識者の讃辞をうけたが、既成の上映機構の中では陽の目をみず、製作に携った俳優座と新星映画社が自主上映にふみ切ったもので、現代の若者が直面する身近かな悩みを若者のリズムで描いている点が感動よをぶ。

あらすじ

佐藤家では、大学生の三郎が食費をいれないというので、朝から喧嘩である。ひっくり返った家の中で、オリエはおさんどんに明け暮れる生活がいやになってしまった。友だちのマチ子とジュン子を頼って家をでたオリエは、二人の生活のきびしさに触れ、靴工場で働きだす。仕事になれないオリエを手伝ってくれたのは、足の悪い戸坂だった。

オリエの居所をさがしあてた次郎は、行商しながら組合をささえているマチ子を知って力を貸すうちに、好きになってしまう。

ある日、太郎の働く建設工事現場で、下請けの労務者が足を機材で砕かれた。太郎は、わずかな見舞金ですます会社のやり方が納得できず上役につめより、首になってしまう。そんな太郎に魅力を感じながらも、平凡な打算をすてきれないよし子は、学歴のない太郎との結婚をことわる。

学歴のないみじめさを思いしらされた太郎は、二度目の入試に失敗した末吉に、たのむから大学へ行けといい、貧しい戸坂のもとへ行くというオリエに、俺の世話する男と結婚しろという。両親を失ってから、幼ない兄弟を育ててきた太郎はみんなでお金をためて、五人のための家をたてるのが夢なのだが、三郎はそれに鋭く反発する。母が死ぬ時、もうちょっとでいいからお金が欲しいねといったのは、太郎兄の金・金とはちがうんだと三郎はいう。友だちで、金に困っているのはたくさんいた。みんな金は欲しい。だけどそれは、太郎兄の金・金とはちがうんだ、金より強いんだぞ人間は！と叫ぶ三郎に太郎は激しく対立する……

若者たち